

現代教育界の思想を振り返る

—— Alfie Kohn の「子育て論・家庭教育論」批判をめぐって ——

友 野 清 文

はじめに

子育てや家庭教育は常に語られるテーマである。それは殆どすべての人にとって身近なものであり、重要な問題であると見なされているからである。しかしそれだけに自らの体験や見聞を元にしたものが中心となり、客観的な議論が難しい。

また 20 年ほど前から行政も、子育て・家庭教育のあり方に関心を示すようになってきている（その一つのきっかけは 1997 年に神戸市で発生した児童連続殺傷事件であった）。例えば、文部科学省関係の委員会では以下のような指摘がなされてきた。

「乳幼児を持つ若い母親たちの多くが社会との接点を持たずに孤独な育児を行っていることなどによる家庭の教育力の低下、具体的には、子どもとの接し方や教育の仕方がわからない親の増加、しつけや子育てに自信がない親の増加、過保護や過干渉、無責任な放任などがあるのではないかと指摘されています」（文部科学省「今後の家庭教育支援の充実についての懇談会」報告『「社会の宝」として子どもを育てよう！」 2002 年）¹。

「よい親になりたいと思っても、経済的な問題や生活のストレスから家庭生活に余裕がなく、家庭教育を行うことが困難になってしまっている家庭もあります。一方、教育に関心が高く、様々な教育資源の情報収集や活用を図っている家庭もあり、家庭教育が二極化している状況ともいえるでしょう。またどんな家庭においても、子育てに力を注ぎ込むあまり、子育ての悩みや不安を抱えてしまったり、また、子どもに対して過剰な期待をしたり、子どもの主体性への配慮に欠ける関わりをしてしまうという懸念があります」（文部科学省「家庭教育支援の推進に関する検討委員会」報告「つながりが創る豊かな家庭教育～親子が元気になる家庭教育支援を目指して～」 2012 年）²。

「近年、共働き世帯やひとり親世帯の増加といった家族形態の変容や、相対的貧困率の上昇に見られるような経済的な問題などにより、家庭生活に余裕のない家庭が増えつつあります。また、地域社会のつながりの希薄化等を背景として、保護者が子育ての悩みや不安を抱えたまま、相談する相手がなくて地域で孤立してしまうこともあります。乳幼児期の子供を持つ保護者の社会的な孤立感は児童虐待の要因の一つとして指摘されていますし、学齢期の子供を持つ親にとっては、不登校やいじめ、暴力行為などの問題も深刻な問題です。さらに、昨今、子供たちが加害者や被害者となる痛ましい事件が頻発しています」（文部科学省「家庭教育支援手法等に関する検討委員会」報告「訪問型家庭教育支援の関係者のための手引き」 2016 年）³。

以上のように、家庭教育をめぐる様々な課題が指摘されており、その背景として、親の置かれている状況や意識・態度が指摘され、それによって子どもの問題が引き起こされているといわれている。そこでの一つのキーワードは「家庭の教育力の低下」である。⁴

また内閣府の政策会議である教育再生実行会議でも、今後の検討課題の一つとして「学校・家庭・地域の役割分担と教育力の充実について」が取り上げられ、「家庭や地域の教育力の低下が指摘される一方、今日の教育現場は、教師の長時間労働によって支えられている面が大きい、こうした状況を変えなければ、教育の持続的な発展は困難であるといわざるを得ず、学校教育の土台となる家庭や地域がその責任をしっかりと果たすことは、今後、ますます重要になってくる」⁵と述べられている（なおもう一つのテーマは「自己肯定感」である）。

「家庭の教育力の低下」という認識については、広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』（講談社現代新書 1999年）や大倉幸宏『「昔はよかった」と言うけれど 戦前のマナー・モラルから考える』（新評論 2013年）などによる全面的な批判があるが、現在でも根強く存在している。そこには「普遍的な事実」よりも「自らの体験」や「思い込み」による判断があるといえよう。それが一般の人々だけでなく教育政策立案者などにも見られるため、家庭教育についての政策が実証的データに基づくものではなく、親への一方的要求や精神論に陥る危険がある。

このような事情は日本だけではない。根拠の乏しい「昔は良かった」という判断に基づいて、「常識的見解（思想）」が形成される事例は各国にある。教育の領域では、特に実態や成果の把握が難しい家庭教育・子育てについてその傾向が顕著である（殆どすべての人が何らかの形で家庭教育に関わるので、「身近な事例」が豊富であるという事情もある）。

本稿ではアメリカでこの問題を取り上げている Alfie Kohn（1957年～）の議論を検討する。Kohn は1980年代半ばから主に社会や学校教育をめぐる「常識的な思想」（人は競争により向上する、報酬が動機付けとなる、宿題は必要である、標準テストが学力向上に有効であるなど）を批判的に検討してきた人物であるが、10年ほど前から家庭教育や子育てについても、同様の議論を行っている。以下で Kohn の議論を手がかりとして、現在の子育て・家庭教育論を検討し、それによって現代の教育についての思想の一端を振り返りたい。そしてそれを通して、日本の子育て・家庭教育論に必要なものが何であるかを考えていく。

1. Alfie Kohn について

1) 経歴

Kohn は1957年にフロリダ州のマイアミ・ビーチに生まれ、1979年にブラウン大学を卒業し、翌80年にシカゴ大学で社会科学の修士号を得た。1979年～85年、高等学校で実存主義のコースを教えていたという。⁶ 1980年代から文筆活動に入り、新聞や教育関係の雑誌に文章を発表し、1986年に最初の単行本として *No Contest: The Case Against Competition* を刊行した。その後はフリーの研究者として活動を続けており、社会的にも広く知られている。⁷

2) 著作について

Kohn の著作は2017年2月の時点で14冊ある。筆者の見るところでは、①特定のテーマに関するもの ②学校教育に関するもの ③子育て・家庭教育に関するもの、に大別できる。各々に属する書名は以下の通りである（各々の項目の中で刊行順）。

① 特定のテーマに関するもの

（1）*No Contest: The Case Against Competition* (Houghton Mifflin, 1986/1992) [以下 *No Contest*]

- (2) *You Know What They Say...: The Truth About Popular Beliefs* (HarperCollins, 1990)
- (3) *The Brighter Side of Human Nature: Altruism and Empathy in Everyday Life* (Basic Books, 1990)
- (4) *Punished by Rewards: The Trouble with Gold Stars, Incentive Plans, A's, Praise, and Other Bribes* (Houghton Mifflin, 1993/1999) [以下 *Punished by Rewards*]

② 学校教育に関するもの

- (5) *Beyond Discipline: From Compliance to Community* (Association for Supervision and Curriculum Development, 1996/2006) [以下 *Beyond Discipline*]
- (6) *What to Look for in a Classroom... and Other Essays* (Jossey-Bass, 1998)
- (7) *The Schools Our Children Deserve: Moving Beyond Traditional Classrooms and "Tougher Standards"* (Houghton Mifflin, 1999)
- (8) *The Case Against Standardized Testing: Raising the Scores, Ruining the Schools* (Heinemann, 2000)
- (9) *What Does It Mean to Be Well Educated? And More Essays on Standards, Grading, and Other Follies* (Beacon Press, 2004)
- (10) *The Homework Myth: Why Our Kids Get Too Much of a Bad Thing* (Da Capo Press, 2006)
- (11) *Feel Bad Education: And Other Contrarian Essays on Children and Schooling* (Beacon Press, 2011)
- (12) *Schooling Beyond Measure & Other Unorthodox Essays About Education* (Heinemann, 2015)

③ 子育て・家庭教育に関するもの

- (13) *Unconditional Parenting: Moving from Rewards and Punishments to Love and Reason* (Atria Books, 2005) [以下 *Unconditional Parenting*]
- (14) *The Myth of the Spoiled Child: Challenging the Conventional Wisdom about Children and Parenting* (Da Capo Press, 2014) [以下 *The Myth of the Spoiled Child*]

これ以外に編著として、以下のものがある。

- ・ *Education, Inc.: Turning Learning into a Business* (SkyLight Training and Publishing Inc., 1997/revised edition Heinemann, 2002)

本の成り立ちから見ると、(i) 書き下ろし (と思われるもの) (ii) ブログや記事をまとめたもの、に分けられる。(i) に含まれるのは (1) (2) (3) (4) (7) (8) (10) (13) (14), (ii) に含まれるのは (5) (6) (9) (11) (12) である。

また邦訳がある著作は次の2点で、以下の通りである。

- (1) *No Contest: The Case Against Competition* (1992年版)

山本啓・真水康樹訳『競争社会をこえて—ノー・コンテストの時代』

(叢書・ユニベルシタス) 法政大学出版局 1994年

(4) *Punished by Rewards: The Trouble with Gold Stars, Incentive Plans, A's, Praise, and Other Bribes* (1999 年版)

田中英史訳『報酬主義をこえて』(叢書・ユニベルシタス)

法政大学出版局 2001 年 (2011 年 新装版)

著作の内容を見ると、1980 年代半ば～1990 年前半には競争、人間性、報酬、あるいは通説の問い直しといった広く人間性に関わる内容になっているが、1990 年代後半から学校教育のあり方を問うものになっており、学校での競争や報酬(賞罰)に加えて、標準テスト(standardized test)や宿題、道德教育についての議論を展開した。さらに 2000 年代半ばから子育てに関わる内容が加わっている。邦訳がある 2 点はいずれも初期のものであり、Kohn の学校教育や子育て・家庭教育についての著作はまだ翻訳されていない。

3) 日本への Kohn の紹介

上で見たように翻訳書は 2 冊であり、その中の「訳者あとがき」で Kohn についてのその時点での紹介が行われている。また各々について書評が書かれている。前者については、久富善之「徹底した反競争の書『競争社会をこえて—ノー・コンテストの時代』」(教育科学研究会『教育』45 巻 8 号 国土社 1995 年)、後者については角皆優人「内なる動機をむしばむ『報酬』の危うさ『報酬主義をこえて』アルフィ・コーン」(朝日新聞社『論座』2001 年 5 月)である(久富は教育社会学者、角皆はプロスキヤー)。

また Miriam T. Black “Punished by Rewards? Application and Misapplication of the Principles of Operant Conditioning” (東洋英和女学院大学『人文・社会科学論集』第 26 号 2009 年)は、*Punished by Rewards* に対して、オペラント条件付けの適応を誤っていると批判している。

Kohn について日本でのまとまった紹介・批判は以上である。この他に引用・紹介を行っている論文等は管見の限りでは以下の通りである(刊行順)。

- ・長澤光雄「大学生の体育における競争の認識に関する一考察」
(『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第 22 号 2000 年)
(参考文献で『競争社会をこえて』を掲載。本文では言及なし)
- ・窪田暁子「遊びと労働と…その変貌とメンタルヘルス」(『こころの健康』Vol. 16 No. 1 2001 年)
(日本精神衛生医学会での講演。『競争社会をこえて』を引用・紹介)
- ・神野直彦「競争社会から協力社会へ—日本保健医療社会学会に期待する—」
(『保健医療社会学論集』15 巻 2 号 2005 年)
(日本保健医療社会学会の記念講演の中で、競争社会の批判者として Kohn を紹介)
- ・水田聖一「アメリカ道德教育の新しい潮流」(『富山国際大学国際教養学部紀要』VOL. 2 2006 年)
(人格教育についてコーンに言及。内容には触れられていない)
- ・渡邊席子「大学生の学びへの志向に関する事例報告」
(大阪市立大学『大学教育』第 4 巻第 1 号 2007 年)
(内発的動機付けについてコーンを引用)
- ・中嶋大輔・足立学「チームスポーツにおける組織力強化に関する一考察—動機付けを視座に—」

(京都外国語大学国際言語平和研究所『研究論叢』85巻 2015年)

(参考文献で『報酬主義をこえて』を掲載。本文では言及なし)

- ・竹内進「内発的動機と運動意欲の関係ーヨコミネ式保育との比較を絡めてー」

(『大和大学研究紀要』第1巻 2015年)

(外発的動機付けへの批判者の一人として Kohn に触れている。参考文献には挙げられていない)

以上の引用・紹介では、翻訳された2冊の内容に関するものが殆どである。翻訳書の状況と同様に、論文などでも Kohn の学校教育や家庭教育論については未だ紹介されていないといえる。⁸

4) Kohn の問題意識と関心

彼の問題意識の変遷については *What to Look for in a Classroom... and Other Essays* の序文で触れられている。この本は1990年代に書かれた記事をまとめたものであり、テーマは様々であるが、統一された agenda (基本的な問題意識) があるとされている(以下の引用の翻訳はすべて筆者によるものである)。それは「教育者(そして親)として、最も基本的な慣行(practice)とその前提を見直す」⁹ ことであり、同時に「Xが正しいのか?」ではなく「ここで正しい問いをしているのか、正しい方法で問うているのか?」を問うことである。Kohn 自身にとって意味ある問いは「根源的(radical)」なものであり、それは例えば以下のような問いであるとされる。

- ・「学力の水準を高める」ことに関心を払う前に、この取り組みが前提としている生徒観や学校観は何かを問うべきである。
- ・子どもにより多く読書をさせようとするよりも、その試みが、子どもの読み方や読む動機にどのような影響を与えているかを問うべきである。
- ・生徒の成績をより良く評価しようとする試みは再考されるべきである。なぜならば、大切なのは評価方法よりも評価の動機(目的)であり、生徒の成績に関心を払いすぎると生徒の学習を損なうからである。さらに、教室で行われていることを「仕事(work)」と見なすことに問題があるからである。¹⁰

彼の最初の著作である *No Contest* (1986) は競争主義を批判するものであったが、その後の問題関心は、「協同学習(意義と問題点)」「優秀さと競争(両者が相容れないものであること)」そして「競争が人間の『本性』ではなく『育てられたもの』であること」に移り、これらはいずれも学校や教育に関わるものであったことから、教育問題へと焦点化していった。*Punished by Rewards* (1993) で論じた動機付けについても、そこで取り上げた学校、職場、家庭の三領域の中で、とりわけ学校の場合に関心を寄せたという。¹¹

2. Kohn の子育て・家庭教育論について

子育て・家庭教育論に関わる著作は2冊あるが、紙幅の関係もあり、ここでは近刊である *The Myth of the Spoiled Child* (2014) を中心に取り上げる。その前に、Kohn の関心の所在と *Unconditional Parenting* (2005) についても触れておく。

1) 子育て・家庭教育への関心

Unconditional Parenting (2005) の中で、Kohn は自らの娘のベビーシッターが「私は、子ども

の良い振る舞いに注目する」と話したことを批判的に紹介している。¹² 推測ではあるが、二人の子どもを育てた Kohn が、それまでの自らの研究を子育てや家庭教育の場面に適用しようと考えた可能性がある。

また *The Myth of the Spoiled Child* (2014) について、ある家庭教育のサイト (<http://thestir.cafemom.com/>) でのインタビューで、この本の執筆の動機について以下のように語っている。

一般のやり方や考え方と、正しい論理や証拠が反対方向を向いている状況にいつも関心を抱いてきました。そして子どもについての多くの考え—どのように育てられているか、どのような存在なのか—は根拠が薄いことに以前から気付いていました。そしてそのような考えの背後にあるイデオロギーに関心を持っていました。特に政治的には進歩的である人でさえも、非常に保守的な一連の考えを無批判に受け入れるように見えるのは何故か、についてです。¹³

先に見たように Kohn の問題関心は、報酬や罰についての人間全般の議論から学校教育へ重点が移り、それに子育て・家庭教育が加わる形になっているが、そこには学問的動機と個人的体験の双方があったのではないだろうか。

2) Unconditional Parenting: Moving from Rewards and Punishments to Love and Reason (2005)

『無条件の子育て 褒美と罰から愛と理性へ』というタイトルからも窺えるように、*Punished by Rewards* (1993) で展開された「報酬や罰で人にあることをさせようとするのは、内的動機付けや行為（仕事や勉強）の内容への関心を低くする」という主張を、子育て・家庭教育の場面で論じている。目次は以下の通りである。

| | |
|------|--|
| まえがき | Introduction |
| 第1章 | 条件付き子育て Conditional Parenting |
| 第2章 | 愛情を与えることと与えないこと Giving and Withholding Love |
| 第3章 | 過度の統制 Too Much Control |
| 第4章 | 罰を与えることの害悪 Punitive Damages |
| 第5章 | 強制される成功 Pushed to Succeed |
| 第6章 | 何が親を旧態依然にするのか What Holds Us Back? |
| 第7章 | 無条件の子育ての原則 Principles of Unconditional Parenting |
| 第8章 | 条件なしの愛情 Love Without Strings Attached |
| 第9章 | 子どもにとっての選択 Choices for Children |
| 第10章 | 子どもの視点 The Child's Perspective |

第6章までで子育ての現状が批判的に検討され、第7章以下で自らの意見が主張されている。

本書の主張の概要は、2009年9月24日の New York Times の Motherlode 欄で Kohn 自身が整理しており、本稿の記述はそれに依拠する（これは Kohn が9月14日付の同紙の科学面に書いた “When a Parent’s ‘I Love You’ Means ‘Do as I Say’”¹⁴ というコラムに対する読者の反響を整理したものに、本人が改めて説明を行った記事である）¹⁵。

ここで Kohn は本書で述べられている主導原理の内容を以下の 10 点にまとめている。¹⁶

(1) 子どもへの要求を再考せよ。

子どもが親の言うことを聞かないときは、子どもに問題があるのではなく、親が子どもに求める内容に問題がある。

(2) 親子関係を最優先とせよ。

日々の雑事より大切なのは、長い期間にわたる、子どもと持つ—あるいは持たない—つながりであり、子どもが親を信頼するかどうか、そして親が子どもを信頼していると子ども自身が知っているかどうかが重要である。

(3) 子どもの立場からどのように見えるのかを想像せよ。

いつも子どもの視点から見ることができる親は、より子どもを理解しており、より優しく、子どもの道徳性の発達の要である多面的に物事を見る姿勢 (perspective-taking) の実例をより多く示すことができる。

(4) 取り繕うな。(Be authentic.)¹⁷

子どもが必要としているのは、一人の人間—欠点はあるが、思いやりがあり、傷つきやすい—であって、キビキビと有能で完全な親のふりをする人ではない。

(5) 話すよりも、尋ねよ。

話すのは怒鳴るより良く、説明することは単に話すよりも良いが、説明するよりも (子どもの感情や考えや好みを) 聞き出す方が良いことがある。

(6) 「子どもに対しては、事実と一致する最も良い動機を想定せよ。」

これはネル・ノディングス¹⁸の言葉である。彼女によれば、子どもは親の期待に添おうとする、あるいは (低い期待に対しては) それに見合ったように行動するものであるので、子どもの行動の理由が分からないときは、最善 (の動機) を想定するのがよい。

(7) 「いいよ」と言うようにせよ。(Try to say yes.)

機械的な子育てをせず (Don't function on autoparent.), 子どもが普通とは違うことをする機会を不必要に奪わないこと。幼いとき故意に欲求不満を抱く状態に置かれたからといって、欲求不満により良く対処できるようになるものではない。

(8) 厳格であるな。

子どもの行いを予測しすぎることもある。一見、厳格なルールは必要ではあるが、困った振る舞いを、罰するべき逸脱と見るのを止めて、(一緒に) 解決すべき問題と見るようになると、そのようなルールは必要なくなる。

(9) 子どもに自分の生活についての決定権をより多く与えよ。

子どもは指示に従うのではなく、自分で決めることによって正しい選択ができるようになる。親に求められる基本的な対応は、(その機会を与えない差し迫った必要がない限り) 子どもに選ばせることである。

(10) 無条件に愛せよ。

子どもは、自分が愛されるのは、自分が何をするかに対してではなく、自分が存在するということだけに対してであることを知らされるべきである。(タイムアウト¹⁹のような) 罰や (賞賛のような) 報酬を与えることは、親の愛は自分で勝ち取らなければならないというメッセージを

子どもに伝えるが、それは心理学的に見て、子どもが必要とするものとは正反対である。
以上に加えて、本書では以下のような原理も挙げられている。²⁰

- ・自分自身を振り返れ。
- ・長期的な目標に関心を払え。
- ・行動だけでなく見方を変えろ。
- ・子どもを尊重せよ。
- ・子どもの年齢を勘案せよ。
- ・不必要に「ダメ」と言わない。
- ・急かさない。

以上、Kohn 自身による本書の要約を見たが、彼がここで強調するのは、子どもを一人の人間として尊重すること、子どもの成長を長い目で見ること、そして子どもに対して「何かを行う (doing to)」のではなく、子どもと「ともにする (working with)」ことの重要性である。この点は次著でも基本的には引き継がれる。

3) The Myth of the Spoiled Child: Challenging the Conventional Wisdom about Children and Parenting

本書の刊行は 2014 年 3 月である。2016 年 3 月に Beacon Press からペーパーバック版が刊行されているが、その際タイトルが *The Myth of The Spoiled Child: Coddled Kids, Helicopter Parents, and Other Phony Crises* となり、副題が変更されている（以下の引用は 2016 年のペーパーバック版による）。

Unconditional Parenting (2005) が Kohn 自身の見解の主張を中心としているのに対して、本書はその主張を支える理論的・歴史的根拠に触れながら、改めて子育て・家庭教育のあり方を問うものとなっている。目次は以下の通りである。

まえがき Introduction

第 1 章 放任的な親、甘やかされた子ども、そしてその他の強力な仮想敵

Permissive Parents, Coddled Kids, and Other Reliable Bogeymen

第 2 章 子育てを相対化する Parenting in Perspective

第 3 章 甘やかしの誇張 Overstating Overparenting

第 4 章 頭の叩かれ方の学習: 動機づけ、失敗、参加賞への批判

Getting Hit on the Head Lessons: Motivation, Failure, and the Outrage over Participation Trophies

第 5 章 隠された価値: 条件性、希少性、そして剥奪

The Underlying Values: Conditionality, Scarcity, and Deprivation

第 6 章 自尊心への攻撃 The Attack on Self-Esteem

第 7 章 なぜ自律が過大評価されるのか: やり抜く力、マシュマロ実験、そして内部統制の詳細な検討

Why Self-Discipline Is Overrated: A Closer Look at Grit, Marshmallows, and Control from Within

以下で各章の内容を概観するが、全体 268 ページのうち、巻末の註が 38 ページ、参考文献が 27 ページでかなりの分量となっている。Kohn の他の著作と同様、文献や研究を渉猟したことが窺われる。

まえがきでは、子育てに関する「常識」が伝統的な考え方に支配されていることを指摘する。政治的・社会的進歩派でも、子育てになると「保守的」な立場を取るのである。Kohn がこれに気付いたのは、両者の学校教育についての姿勢に共通点を見出したときであった。ジョージ・W・ブッシュ大統領（任期 2001 年 1 月～2009 年 1 月）とバラック・オバマ大統領（任期 2009 年 1 月～2017 年 1 月）の一般政策は大きく異なるが、教育については、前者の “No Child Left Behind Act” と、後者の “Race to the Top” は同一の考えに基づいており、「学力向上＝標準化された試験成績の上昇」と捉え、学校間（とりわけ公立学校とチャータースクールの間）での競争を導入することでそれを達成しようとする方向は同じであると、Kohn は指摘する。²¹

同様に子育て・家庭教育についても以下のような「共通認識」があるとする。

- ・現代では、放任的な親が子どもに限度を示したり、「ダメ」と言うことがない。
- ・親は子どもを過保護にして、子ども自身の過ちによる当然の報いを体験させない。子どもは失敗から学ぶものであるが、親がその機会を奪っている。
- ・大人たちは子どもに自分が特別であると感じさせることばかりを考えているため、当然の権利としての特別扱いを主張する自己愛的な子ども（entitled narcissists）世代を育てている。チームが勝たなくてもトロフィーが得られ、何も特別なことをしなくても誉められ、学校ではどのようなものを提出しても A がもらえる。そして容赦ない現実世界に踏み込んで初めて厳しい現実が目覚める。
- ・若者が必要としている－そして持っていない－のは自尊心ではなく自律心である。それは、満足を先延ばしにし（defer gratification）、衝動をコントロールし、そして長期にわたって課題と取り組み続ける力である。²²

その上で Kohn は現在の議論を三つに分類する。つまり①事実の叙述（「甘やかしが広がっている」など）②予測（「甘やかされて育てられた子どもは成人したときに上手くやっていけない」）③価値判断（「自尊心は勝ち取られるべきものである」）の三つである。①についてはそれが正確かどうか、②についてはそれを支えるデータがあるかどうか、そして③についてはその価値が妥当（defensible）かどうか、を検討することが、以下の各章の課題であるとしている。

第 1 章では「親が放任主義であり、子どもが甘やかされている」という批判が検討されている。Kohn によれば、この種の言説は古代ギリシャのヘシオドスやソクラテスにまで遡ることができるという。そして 19 世紀以降、常に一世代前を参照して「昔に比べて今の親は甘く、子どもは甘やかされている」と繰り返されてきたとしている。現代について、「放任主義の子育てが一般的であるという証拠は全くない」と Kohn は主張する。²³ また現在の子どもが以前に比べて甘やかされていたり、自己愛が強いという傾向は証明されない。Kohn は「郷愁は記憶喪失の裏返しにすぎない」²⁴ というアドリエヌ・リッチ（1929 年～2012 年）の言葉を引用して、過去の美化を戒めている。²⁵

第 2 章では、「親（良い親）であることとはどういうことか？」が論じられる。親は放任主義である

ことを恐れるあまり、逆に子どもをコントロールしようとする、Kohn は主張する。²⁶ そして彼が力説する「do(ing) to～」(～に何かを行う)に対する「work(ing) with～」(～と一緒に動く)が改めで説明される(この両者の対比表現は Kohn の教育についての最初の著作である *Beyond Discipline* (1996) で多用されており、*Unconditional Parenting* (2005) を含め、その後も繰り返し用いられている)。

「work(ing) with」はコントロールではなく協働 (collaboration)、力よりも愛と理性を強調するものであり、以下の要素を含むとされる。

- ・子どもを無条件で受け入れる。すなわち子どもが行うことに対してではなく、子どもがその子である (who they are) ことで愛する。
- ・子どもが自分に関わる事柄について決定する機会を日常的に与える。
- ・従うことを求めることよりも、子どもの必要性に対応し、助言を与えることに焦点を当てる。
- ・良くない行い (misbehavior) を、子どもが罰を受けるという「結果」に結びつく逸脱と見なすのではなく、問題解決と教育の機会と見なす。
- ・子どもの行動を引き起こす動機や理由を理解するために、行動の背後を見る。²⁷

このような子育てを行うことで、子どもは親の言うことを受け入れるようになり、成長してから社会面でも学業面でもより健全になる、ということが実証されている。

このような「working with」は「甘やかし」とは異なるが、両者が混同され、同時に「甘やかし」の反対が「権威主義的 (authoritarian)」であると見なされるために、「working with」が正しく理解されないと Kohn は述べる。²⁸

第3章は、甘やかし (overparenting) について検討している。以前よりも甘やかしが広まったという根拠はないとした上で、甘やかしはむしろ「子どもに対する過度のコントロール」だと理解すべきだとする。²⁹ そしてこのコントロールには「行動のコントロール」と「心理的コントロール」があり、後者は愛情を梃子として行われるのである(「言うことを聞かないとお前を愛することをしない」という暗黙のメッセージを送る)。これは「条件付き愛情」の行使であって、子どもにとって親の愛は与えられるものというよりも、勝ち取るものとなり、そのように思う子どもは自らをたいしたものではない (lousy) と感じるようになる。³⁰

さらに近年語られることの多い helicopter parents (子どもの上をヘリコプターのように旋回して、何かあれば直ぐに降りて助ける、というイメージから、過度に世話を焼き介入する親。ここでは主に大学生の子どもに対して論じられている) についても、そのような親が増えたという事実は確認できないとしている。その上で独立 (self-sufficiency)・自立 (independence) と成熟 (maturity)・自律 (autonomy) は異なると述べる。重要なことは親から離れてすべて自分でできるようになることではなく、親との関係を保ちながら、自分の利益や価値観に合った行動ができるようになることであるとする。³¹ そして子どもの意向や必要に応じた対応を行い、子どもがどのように感じ認識するかを第一に考えることが重要であると述べる。³²

第4章は、「ドッジボールが攻撃性を高め、弱いものいじめになるという理由で禁止した学校に対する批判 (それは人生の教訓を教える機会を奪うものである)」「課題に零点をつけるのを禁止した学区に対する批判 (生徒の出来に応じた点数は当然である)」「優秀な成績を収めた生徒だけを集めて賞を与えることを止めて、全員の生徒の前で多くの分野についての賞を与えることとした学校への批判 (優れていることを評価しないことは誤りである)」の事例から始まる。これらはすべて動機付けに関わる「報

酬」「競争」「失敗」の問題である。本章では経験的 (empirical) な側面－証拠によって事実であるかどうか判断できる面－を検討し、次章で、規範的 (prescriptive) な側面－論者の選択や価値観の問題－を扱う。³³

報酬については *Punished by Rewards* (1993) で扱われた問題が再論されている。「何をしても皆が報酬を得られるのであれば、がんばらなくてもよいのではないか？」という問いに対して Kohn は、報酬 (reward) や賞 (award＝希少性のある報酬) は最終的には動機付けを下げるという。動機付けには外発的 (extrinsic) 動機付けと内発的 (intrinsic) 動機付けがあり、重要なのは後者である。外発的動機付けを与えることは、行為の内容自体についての興味を下げるのである。³⁴ 賞は競争によって得られる (「希少性」を求めて競う) ものであるが、報酬も同様の効果を持つ。さらに「自分が成功するためには人が失敗しなければならない」という意識を持たせることになる。³⁵

また「将来の人生のために、子ども時代から苦痛や失敗といった不快な経験をする必要がある」という主張については、誤ったものであると指摘する。Kohn は BGUTI (Better Get Used To It 慣れておいた方がいい) と表現しているが、子どものときに意図的に不幸な体験をしても、大人になってから不幸により良く対処できるものではない、としている。むしろ、子ども時代に成功と喜び、支援や尊重、愛情ある導き、無条件のケア、自分自身についての決定権を与えられることが、実社会の問題に対処するための準備であるという。³⁶

失敗についても同様で、成功するために必要なのは、それに先立つ成功体験である。「成功を求めること」と「失敗を避けようとする」とは全く異なることであって、失敗体験は成功を求める挑戦への動機付けを減退させる。あるいは self-handicapping (失敗を正当化するために初めから努力しないこと) が見られるようになる。³⁷

第5章は、前章で扱われた問題の価値的な側面が論じられる。動機付けのために報酬が必要であるという判断の背後には条件性 (conditionality)、競争が優秀さにつながるという判断には希少性 (scarcity)、そして失敗や不幸が将来への有効な備えとなるという考えには剥奪 (deprivation)、が各々基本的価値と見なされていると指摘する。³⁸

先ず条件性については、報酬 (賞賛) にせよ罰にせよ、それらは子どもへのコントロールであるとする。特に賞賛 (褒めること) については一般的に「子どもを褒めすぎるのは良くない」「本当に褒めるに値する場合にのみ褒めよ」と言われるが、それは、親が是認する行為を褒めることによって、子どもへのコントロールを強める結果になるからである。³⁹

次の希少性については、社会の原理がなぜ競争的なのかを問うべきであるとする。トロフィー (賞) をより多くの子どものに与えることは、競争自体の解消にはならず、「自分が成功するためには他人の失敗が必要である」というメッセージは残る。能力に違いがあるのは当然であるが、それは「誰かが勝ち、誰かが負ける」という枠組で考えるのではなく、「できる者は幸運にも、できない者を助ける立場にある」「できる・できないが逆転する領域では役割交代する」と、互いの良さを見ることができるように再認識 (reframe) される必要がある。⁴⁰

最後の剥奪については、BGUTI の考えは、結局のところ現状肯定を教えることであり、現実を批判的に分析することをさせないという。大切なことは、現状とは別のあり方が存在することを考えられるようになることである。⁴¹

ここまでは主に、親 (大人) の子どもへの姿勢についてであったが、第6章以下は子ども自身の認

識に関わる問題を扱う。第6章は自尊心 (self-esteem) を論じている。

自尊心は1980年代から重視されてきたが、1990年代半ばからバックラッシュを受け、自尊心の弊害が強調されるようになったという。自尊心は定義することが難しいが、少なくとも「真の自尊心」と「自己愛的な自己誇示 (narcissistic self-aggrandizement)」とは全く異なるものである。⁴² そして自尊心は基本的には子どもにとって重要なものであり、低いよりも高い方が良いが、大切な要素は「安定性 (stability)」であるとする。安定しない自尊心 (状況によって自尊心を感じられたりそうでなかったりする) は一般的に低い自尊心になると同時に、怒りや抑うつ、不安につながるのである。そしてこれは条件性 (条件付きの評価) によるという。子どもは条件付きでしか自分を受け入れられなくなり、「あることをするときだけ自分には価値がある」と感じる。Kohn は、自分自身をどう見るかによって、自分が何をするかは付随的なものであるべきだと結論付けている。⁴³

第7章は自己鍛錬 (self-discipline) についてである。⁴⁴ ここでは近年よく語られるトピックについて批判的な検討が行われる。

第一は「マシュマロ実験」である。これは子どもにお菓子を見せて「いつ食べてもよいが、私が戻ってくるまで我慢したらもう一つ多くあげる」と伝えて一人にさせ、我慢できるかどうかを実験したものである。一般的には「我慢できた子ども (自制心がある子ども) は将来学業面でも社会面でも優れている」という形で紹介されるが、これは誤りであるとする。実験を行った Walter Mischel の関心は個人の自制心ではなく、我慢できるメカニズム (状況) であり、自制心 (self-control) を発揮しなくてもすむように、例えばおもちゃで遊んだりすることで気を紛らわした子どもが食べるのを我慢できたのである。その上で、自制心が全面的に良いものであるとは限らないと指摘する。

例えば

- ・自制心の高い子どもは、自発性や穏やかな感情生活を持ちにくい。
- ・自制心が過度に強い幼児は、若者になったとき、慣習的、道徳主義的で、不確実さを許さない傾向がある。
- ・自制心が強い十代の若者は、麻薬を使うことは少ないが、「自制心が低く、少しは麻薬に手を出すかもしれない」若者に比べて、全体として上手く社会に適応できない。
- ・過度の自制心により、若い女性 (男性ではない) はうつ状態になる危険がある。

自己鍛錬は健康よりも、傷つけられやすさ (vulnerability) の証であり得ると Kohn はいう。⁴⁵

次に「内的統制 (control from within)」であるが、第4章で述べられた外発的動機付け (extrinsic motivation) と内発的動機付け (intrinsic motivation) を敷衍し、内的統制がすべて「内発的動機付け」ではないと指摘する。そこには内面化された (internalized, introjected) 動機付けもあるのである。外部からの指示や命令に従うことを、自分自身で行うようにすることが「内面化された動機付け」であり、これはむしろコントロールの強化である。⁴⁶

第三に「やり抜く力 (grit)」である。⁴⁷ 非認知的技能 (能力) の一つとして近年注目されているが、Kohn は以下の3点を指摘して批判している。

- ・すべてのことに行う価値があるわけではない (まして長い期間にわたっては)。
- ・やり抜くこと (persistence) は非生産的で不健康になることもある。
- ・一般的に言われているほど、「やり抜く力」には利点が多くない。⁴⁸

何かを行う場合、計画を立てたり、他者と協働したり、自信を持ちながらも謙虚に取り組んだりす

るといった様々な要素が必要であり、「やり抜く力」もその一つではあるが、それだけを取り立てて重要視する理由はないという。「何をするのか」ということと同時に「なぜするのかという」理由・目的が重要であり、これは外面的な行動だけの問題ではないが、「やり抜く力」論はその点を見ていないのである。

以上のように、「自制心」「内的統制」「やり抜く力」を批判的に見た上で、最後になぜこのような主題が取り上げられるのかが問われている。Kohn は「Cui bono? (誰が得をするのか?)」ということとを問うべきであるという。個人の資質に着目することで、すべては個人レベルの問題とされてしまい、社会の構造や動きに関心が払われなくなる。そして現実をより良いものに変えていこうという意思を育てることもできなくなるのである。⁴⁹

以上の議論を受けて、終章である第8章は子育ての目的を論じている。子どもは社会の要求と規則に従い、言われたことを行うように育てられているというのが Kohn の現状認識である。⁵⁰ その上で彼は子どもに「reflective rebelliousness (反省的な反抗性)」を育むべきであると主張する。そのためには第一に、思いやり (care) への性向を持つよう支援し、向社会的志向 (prosocial orientation; 他者全体のより良いあり方とともに特定の人のためになるように行動すること、自分以外の視点から社会を見ること、周囲の人の思いに共感すること、そして他者を思いやり困っている人を助けること) を育むこと、第二に、自信が持て自己主張 (assertiveness) できるように支えること、第三に、懐疑 (skepticism) と非同調 (nonconformity) の価値を認める (「なぜ」「いや」と言える) ようにすること、を挙げている。⁵¹

最後に “deep modeling” の重要性が指摘されている。⁵² これは子どもを「舞台裏に (backstage)」連れて行くことであるとして、大人が何をするかだけではなく、なぜそれをするのか、どのように考えるのかを子どもに伝えることであるとする。子どもはそのことで大人の行動を「完成品」と捉えず、その行動を起こすプロセスを知ることができるようになるのである。⁵³

3. Kohn の提起する論点とその意義

1) 提起する論点

ここまで Kohn の 2 冊の著作によって、彼の家庭教育・子育て論を紹介してきた。彼の論点は以下の通りである。

第一には、根拠のない憶測や信念に基づいて、「現状批判」や「提言」が行われることへの批判である。存在しなかった「古き良き時代」を想定して、そこから現状を「批判」することや、研究内容を正しく理解せず、「処方箋」を出すことを強く批判しているのである。⁵⁴

第二には、子育て・家庭教育論が、外から見て取れる行動や、測定可能で短期的な成果や変化のみに着目して、子どもの内面や長期的な視点を欠いているということである。「親が部屋から出て行った後で子どもが何をするか」⁵⁵ が大切なのである。あるいはどのような大人になっていくのかがもっと問われるべきなのである。

第三には、第二と関連して、これまでの議論では「何のために？」という目的が問われないできたということである。ある子育ての方法が「有効」であるという場合に、「何のために？」すなわち「どのような子どもを育てようとしているのか？」という問いがなされないまま議論が行われてきたと彼は主張する。もちろん「どのような子どもに育てるのか」は問われてきたが、目的とされる子ども像 (そして人間像) 自体が検討されることはなく、「親の言うことに従う」「社会の決まりを守る」

ことが無条件に是認されてきたのである。Kohn は、現状肯定をするのではなく、社会を変える力を持つ子どもの育成を目指している。

そして第四には、従来の子育て・家庭教育論が子どもを「コントロール」しようとする発想に基づくものであるという点である。これは人間の外面的な行為にのみ焦点をあてる行動主義的発想⁵⁶である。そしてコントロールは褒美や罰だけでなく愛情によっても行われるのである。先に触れたように「do(ing) to～」ではなく「work(ing) with～」を強調することで、親が一人の人間として率直かつ誠実に子どもと向き合い、支えることの重要性を Kohn は主張する。

2) Kohn の主張の意義—自明性への疑い

Kohn の主張の最大の意義は、自明性への疑いにある。子育て・家庭教育に関する議論は、個人的経験に基づくことが多く、何が事実であるのか把握するのが難しく、同時にその難しさが殆ど意識されていない。「当然である」と思う時点で思考が停止し、それ以上追求する必要性を感じないためである。その中で、「今の子どもは甘やかされているので、厳しさが必要である」「我慢ができない子どもが増えており、自制心を高めることが大切である」などという漠然とした、しかし強固な「思想」が形成されるのである。そしてそれが政策決定や制度設計にも影響を及ぼす。このようなことは無意味である以上に有害であろう。Kohn の指摘はそのような現状への鋭い問題提起である。

もう一つの意義は、子育て・家庭教育の目的と方法への現状代替的な (alternative) 包括的提言を行っている点である。子どもを一人の人間として尊重し、親 (大人) として誠実に指導していくという基本的な方向性は、彼の「競争」や「報酬」や「人間の本性」に関するリサーチを踏まえたものであり、説得力がある。これをどのように具体的に実践するかは読者である私たちの課題である。

おわりに

筆者が Alfie Kohn の名前を知ったのは、Elliot Aronson, Shelley Patnoe 共著 *Cooperation in the Classroom: The Jigsaw Method* (Pinter & Martin Ltd., 2011) の序文においてであった。そこでは、Kohn の *No Contest* (1986) を引用して「ジグソー法を採用している学校が増えている」ことが述べられていた。この本では Kohn の名前はその部分に一回出てくるだけであったが、その後調べていくにつれ、多くの著作や記事を持っている人物であることが分かった。彼の基本的問題関心は Aronson らと同じく「競争原理の克服」であり、その意味でジグソー法とも関わっている。本論では主に子育て・家庭教育論を扱ったが、今後は学校教育に関わる議論も含めて検討する予定である。

なお本研究は昭和女子大学の研究助成を受けたものである。

註

- 1 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/007/toushin/020701.htm (2016 年 11 月 10 日参照)
- 2 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/04/16/1319539_1_1.pdf p. 5 (2016 年 11 月 10 日参照)
- 3 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/03/28/1368962_02.pdf p. 3 (2016 年 11 月 10 日参照)

- 4 2012 年の「家庭教育支援の推進に関する検討委員会」の報告（前掲註 2 参照）では『「家庭の教育力の低下」は子どもの育ちに関する様々な問題の原因を家庭教育に帰着させ、親の責任だけを強調することにもなりかねません」として「家庭教育が困難になっている」と表現しているが、家庭に問題があるという現状認識としては同じであるといえる。
- 5 「教育再生実行会議の今後の進め方について」 p. 2（第 38 回教育再生実行会議配付資料 2016 年 10 月 28 日）<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/dai38/siryou3.pdf>（2016 年 11 月 10 日参照）
- 6 *What to Look for in a Classroom... and Other Essays* (1998) p. ix この時期に書かれたものとして, “Existentialism Here and Now.” (*The Georgia Review*, vol. 38, no. 2, 1984, pp. 381-397. www.jstor.org/stable/41398688), “Freud and Man’s Soul by Bruno Bettelheim” (*The Georgia Review*, vol. 37, no. 2, 1983, pp. 452-456. www.jstor.org/stable/41398539) がある。(2016 年 12 月 1 日参照)
- 7 Kohn は人気トーク番組であった「The Oprah Winfrey Show」に 2 度出演し, *TIME* 誌でも “perhaps the country’s most outspoken critic of education’s fixation on grades, test scores and class rankings.” (「おそらくアメリカで成績, 試験の点数, 席次のあり方についての最も辛辣な批判者」) と評された。(Time 1998 年 10 月 19 日号 [U.S. edition Vol. 152 No. 16] Claudia Wallis “Their Eight Secrets of Success”) (<http://www.alfiekohn.org/bio/> 2016 年 12 月 17 日参照)
- 8 アメリカでは Kohn の主張（特に報酬や宿題に関わる主張）に対する批判がなされ, それに対する Kohn の反論もある。その内容については稿を改めて検討する。
- 9 *What to Look for in a Classroom... and Other Essays* (1998) p. x
- 10 *ibid.* p. xi
- 11 *ibid.* p. xiii
- 12 *Unconditional Parenting* (2005) pp. 36-37
- 13 2014 年 6 月 11 日付 http://thestir.cafemom.com/toddlers_preschoolers/173541/why_kids_should_be_spoiled (2016 年 12 月 1 日参照)
- 14 *Feel Bad Education* に Parental Love with Strings Attached というタイトルで収録されている。
- 15 同内容は Kohn のブログ “So What SHOULD Parents Do?” (2010 年 4 月) にも掲載されている。(http://www.alfiekohn.org/blogs/parents/ 2016 年 12 月 1 日参照)
- 16 http://parenting.blogs.nytimes.com/2009/09/24/punishing-children-with-love/?_r=0 (2016 年 11 月 9 日参照)
- 17 “authentic” という言葉は, Kohn が影響を受けた Carl Rogers がカウンセリング理論の中で用いたものである。
- 18 Nel Noddings (1929 年～); アメリカの教育思想家。ケア理論で知られる。
- 19 time-out; この言葉については, *Unconditional Parenting* (2005) の pp. 25-26 で解説されているが, 元来は動物の行動を統制する文脈で用いられたとする。現在では子どもが「悪いこと」をしたとき, 別の場所へ連れて行きしばらく考えさせること, という意味で広く用いられている。日本での「廊下に立たせる」に近い。
- 20 *Unconditional Parenting* (2005) pp. 119-120
- 21 *The Myth of The Spoiled Child* (2016) pp. 2-3
- 22 *ibid.* pp. 3-4
- 23 *ibid.* p. 20
- 24 *ibid.* p. 11
- 25 同様の指摘は家族史の領域でもなされている。例えば Stephanie Coontz *The Way We Never Were: American Families and the Nostalgia Trap* (Basic Books, 1992) などがある。
- 26 同様の見解は *Unconditional Parenting* (p. 49) にも見られる。

- 27 *The Myth of The Spoiled Child* (2016) p. 39
- 28 「authoritarian」ではなく「authoritative」（正当な権威を持っている）であるべきだという主張もあるが、Kohn は両者に本質的な違いはないとしている。
- 29 *The Myth of The Spoiled Child* (2016) p. 60
- 30 *ibid.* p. 65
- 31 *ibid.* pp. 72-73
- 32 *ibid.* p. 74
- 33 *ibid.* pp. 75-77
- 34 *ibid.* p. 80
- 35 *ibid.* p. 82 この点は、協同学習の一つの手法であるジグソー法を提唱した E. アロンソンも強調している。
- 36 *The Myth of The Spoiled Child* (2016) p. 92
- 37 *ibid.* pp. 96-97
- 38 *ibid.* p. 102
- 39 *ibid.* pp. 106-107
- 40 *ibid.* p. 110
- 41 *ibid.* p. 118
- 42 *ibid.* p. 126
- 43 *ibid.* p. 139
- 44 *ibid.* pp. 141-142 ここでいくつかの用語が整理されている。self-discipline 「望ましいと見なされることを達成するように意志の力を発揮すること」、self-control は「望ましくないと思われることを避けるように意志を用いること」、そして self-regulation はこの両者を含んで「『自然の』性向を克服すること」であるとする。
- 45 *ibid.* p. 151
- 46 *ibid.* p. 156
- 47 Kohn も触れているように、この用語は米国の心理学者 Angela Lee Duckworth が自らの学説のキーワードとして用いたことで広く知られるようになった。Duckworth *Grit: The Power of Passion and Perseverance* (Scribner, 2016) を参照。
- 48 *The Myth of The Spoiled Child* (2016) pp. 159-163
- 49 *ibid.* pp. 170-172
- 50 *ibid.* p. 177
- 51 *ibid.* p. 186
- 52 *ibid.* p. 191 この用語は Kohn の造語であると考えられる。
- 53 *ibid.* pp. 191-192
- 54 ちなみに、昨年（2016 年）の Oxford Dictionaries が「今年の言葉」に選んだ単語が「post-truth」であった。これは「客観的事実よりも感情や個人的信念の方が世論を形成するのにより影響力を持つ状況に関する（もしくは状況を示す）‘relating to or denoting circumstances in which objective facts are less influential in shaping public opinion than appeals to emotion and personal belief’」を意味する形容詞である。Kohn の批判する状況が拡大することが考えられる。
- 55 *Unconditional Parenting* (2005) p. 52
- 56 人間の外的な行動に着目し、「刺激－反応」で理解しようとする行動主義への批判は Kohn の議論の基本的なモチーフである。